学術会議シンポジウム印象記

駒　林　　誠*

気象学会あて招待状が来ると，長期計画担当理事へまわされる関係で，学術会議主催の2つのシンポジウムに出席した．

公害シンポジウム（9月11日）は新装なった学術会議講堂に八分の入りで，傍聴席では男女の学生がノートをとっていた．話題提供は西山卯三（京大・工），牛山積（早大・法），戒能通孝（東京都公害研），提繁（阪大・工），神山恵三（気象研）の諸氏．口から先に生れた学者として定評のある戒能氏は，大統領選挙と自動車エンジンの関係など多彩な話題を述べ，気象学者と海洋学者の怠慢を指適して，1万本以上も煙突がある東京都では，煙突の高さを増しても益がないのに，気象学者が高さにこだわることは理解に苦しむ，し尿や下水を処理して（完全にはきれいにならない）東京湾へ流すのが良いか直接に外洋へ投棄すべきかを，海洋学者が考えて欲しいと問を投げた．

井上栄一氏（農技研）が煙突を高くしても意味がない，田子浦のヘ泥の外洋投棄を絶対にやめるよう学術会議が勧告すべきだと答えた．神山恵三氏は，排棄物を封印して将来人類がそれを利用する方法を発見するまで保管すべきだと主張し，環境の心理面での重要性にもふれて，空に鳥，水に魚，森にけものをモットーとすべきだと結んだ．

戒能氏は，さらに大学出身の技術者と医者がごみ処理業務からすぐに逃亡することをあげて，公害関係の人材養成を大学に期待できぬ点と，公害対策がとかく「測定することおよび大型浄化処理設備をつくることで終る」点が問題であって，「政府が公害を測定する．国民は黙っておれ」とする姿勢につながる危険を指摘した．

GNPの伸びから考えると，東京，大阪，北九州で間もなく利用できる淡水の量を工業用水の必要量が上まわる（西山氏）．原油の脱硫を原産地でおこない，アスファルトを砂ばくの緑地化に使用できる（砂の下に埋めて水を保持する）．汚染問題は学位論文としてまとめにくいので，大学がやりたがらないが "Chemical Reactions in Upper and Lower Atmosphere"（単行本1962）を読めばアカデミックなテーマが一杯ある．光化学スモッグは分圧が非常に低いままで進行できる反応で，触媒として大気中のダストが重要らしい（以上提氏）．公害と遺伝の関係を総合科学的に研究すべし（牛山氏）．

その他に過疎，過密，コンビナートの3地帯，メガロポリス政策，公害学会をつくれなどに意見があり，弾力性に富んだ興味深いシンポジウムであった．しかし若い人達から「ひっ迫している現状認識に欠け，行動提起がない」と発言があったとき，傍聴席から一斉に拍手がおこった．会場が立派過ぎたから，次回は東京湾のごみの島か田子浦のヘ泥の上にすわって開きましょうと閉会の辞があった．

「70年代の科学をめざして」（9月26日）は学術体制委，長期計画委，大学問題特別委，学術会議のあり方検討委，関東地方区など，日頃やかましい面々の主催であったが，講堂はわずか三分の入りで，その数日前に筑波移転の討論会があった折に満員になったとのことで，具体的問題以外には科学者の関心が低いことを如実に示していた．

話題は岡倉古志郎，佐野幸吉，川崎健，小野周，岩尾裕純，小林稔の諸氏から提供され，そのあと福島要一氏の司会で2時間の討論があった．討論会は，「学術会議が無能なため動員力が低い．公害シンポジウムなども世間が騒いでからとり上げた．学術会議が大学偏重を改めなければ良くならない」と火ぶたが切られて，「中性洗剤，労働災害など早くから取り組んだ」，「大学偏重をなじるより，どうすればこの会場が一杯にできるか考えるべきである」（神山恵三氏）と受けて，いささか学生大会じみたパターンで進行した．余りかみ合わない討論会であったが重要な問題点を含んでいたので略述したい．

70年代の科学の重点を人間環境の改善の科学におくべし（井上栄一氏）．科学の自己目的性について世間に不信がある．人間の尊厳を中心とする科学が必要と主張した人もいた．

* 気象大学校
—1970年10月13日受理—

原子力・宇宙・海洋などの巨大科学について主催者のパンフレットが否定的に片付けたことは納得しかねる（東大・地球物理の人）．文学部の辞職勧告にみられるように，大学内の新型ファッショは政府，文部省よりも筑波に行って巨大科学をやりたい仕事熱心な人から発している（東教大の人）．学術会議の長期計画性と科学者の自主性をどう両立させるか（予防衛生研の人）．科学者の総意で決めるよりない（小野周氏）．有権者の資格を学位保持者に限るとか，学位取得後一定年限以内に限るべきかなど検討中（小林稔氏）などの討論があった．

討論を聞いて私は大学にとって学術会議が予算，創設の勧告，研究会開催など日常活動の場所であるのに反し，官庁研究者が非日常的な一時的な関心を示すに過ぎない点を根底から改めるべきだと思った．

Ninth International Symposium on Space Technology and Science, Tokyo, 1971

第9回（1971）宇宙技術および科学の国際シンポジウム

さて，第9回「宇宙技術および科学の国際シンポジウム」Ninth International Symposium on Space Technology and Science, Tokyo, 1971が，来たる1971年5月17日（月）から同月22日（土）までの6日間，東京都千代田区平河町　日本都市センターにおいて開催されることになりました．何とぞお繰合せご参会下さるよう，なお，できれば研究論文をご発表下さるようご案内申し上げます．

研究論文をご発表下さる場合には1971年1月31日までに，東京都目黒区駒場4－6－1　東京大学宇宙航空研究所　河田幸三教授あて，論文題目（英文）および200語程度の英文概要をお届け下さい．ご発表は英語でお願い致します．そのさい，スライド，フィルムなどをご使用になる場合はその旨ご記入下さい．なお，シンポジウム終了の後に，論文集が刊行される予定でありますから，4000語程度（表および図を含めて）の英文原稿1部を会期第1日の5月17日までにご提出頂ければ幸いに存じます．

また，会期中会場の一部で展示が行なわれる計画でありますので，写真，フィルム，スライド，模型その他をご出品下さるようご案内申し上げます．なお，シンポジウムの概要は Preliminary Program の通りであります．

Preliminary Program

Sessions

a）Propellants, Propulsion and Pyrotechnics
b）Materials and Structures
c）Flight Dynamics and Astrodynamics
d）Aerodynamics
e）Aerospace Environment
f）Spacecraft and Rockets
g）Electronics Components and Devices
h）Space Communications, Telemetry and Trackings
i）Guidance and Control
j）Systems Engineering (including Range Operation and Support Systems)
k）Space Science
l）Balloons
m）Space Medicine and Biology
n）Space Law
o）National Space Program (including Activities of Institutions and Societies)